

学校の教育活動の中核は、授業である。そして、教師ならいい授業をしたいと誰も思っている。いい授業は学びが深まり、決まって子どものいい姿が見られ、教師も子どもが学びを創る感覚を得る。これが、次時の授業への意欲にもなり教師生活への活力にもなる。しかし、教師でしか味わえないこの醍醐味が保証できないとしたら問題であろう。教師の意欲をどのように支えるか、今こそ考えなければ、学力の定着も向上もない。

そこで、教師が授業をしようとする意欲を高めるシステムの一つとして、研究授業後の協議のあり方を考えたい。今、どのように進んでいるのだろうか。定番は、自評 質疑 協議 指導助言であろう。これが、悪いわけではない。授業者が再度授業を公開しようと思えばよい。二度と授業をしたくないと思われる内容もある。質疑や協議が単発的で、司会者が「他にありませんか？」を連発したり、意見を順番に求めたりして、研修主題との絡みもない協議は最悪であろう。さらに、参観者が授業の良し悪しを一般論で述べたり、当たり障りのないことを言ったりした後、指導者が歯の浮くような話をして、一件落着する協議も逆に後味が悪い。

このような校内研修会であれば、一つの方法として授業の中での子どもの事実に焦点をあて、その事実で話を進める研究協議にしたい。多くの学校で研究授業後に授業記録が配付されるが、その授業記録こそが授業での事実である。例えば、教師のこの5番目の発問で、A君がどうしてこのようなことを発言し、Bさんがなぜこんな反応を示したかなどを協議対象にするのである。当然、子ども一人ひとりが一番知っている担任や担当が語るなのである。それを聞いて、参観者がさらに発言していく。今日の授業の事実で、協議が終始すれば、授業者を中心とした協議になると思う。少しでも、授業者を主役にする授業研究を行い、授業実践への意欲化を喚起したい。子どもの内面を追究する授業研究にシフトしてほしい。(芝)

